《伝記物語》の変容（その３）

――ロベール・ド・ブロワ作『ボードゥー』をめぐって――

渡　邉　浩　司

1. はじめに

中世フランス文学研究のパイオニアの１人ガストン・パリスの『フランス文学史』第 30 巻所収「《円卓》サイクルに属する韻文物語群」[1]という長大な論考の「序」によれば、12 世紀後半（クレティアン・ド・トロワ以降）から 13 世紀後半にかけて古フランス語韻文で書かれた「アーサー王物語」は、内容の点から「伝記物語」（roman biographique）と「挿話物語」（roman épisodique）のいずれかに分類される。「伝記物語」とは、「1 人の主人公の誕生から、あるいは少なくともアーサー王宮廷への出現から物語を始め、その宮廷で物語の主題となるべき冒険が主人公に課され、主人公の武勇を多少とも長々と語り、最後には主人公の結婚に至るもの」[2]である。これに対して「挿話物語」とは、たいてい「伝記物語」よりは分量が少なく、「1 人の有名な主人公の挿話の 1 つを語るが、しばしば互いに錯綜する多くの冒険からなっていることが多い」[3]ものである。

ガストン・パリスが「伝記物語」に属する作品として挙げているものの

1）　G. Paris, « Romans en vers du cycle de la Table ronde », *Histore littéraire de la France*, t. 30, 1888, pp. 1–270.

2）　*Ibid.*, p. 14.

3）　*Ibid.*, p. 15.

うち、ギヨーム・ル・クレール作『フェルギュス』[4]、作者不詳『グリグロワ』[5]、ルノー・ド・ボージュー作『名無しの美丈夫』[6]、作者不詳『イデール』[7]、ラウール・ド・ウーダン作『メロージス・ド・ポールレゲ』[8]、作者不詳『双剣の騎士』[9]については、これまでに別稿で紹介・分析してきた。本稿では本邦で未紹介のままのロベール・ド・ブロワ（Robert de Blois）作『ボードゥー』（*Beaudoux*）の分析を試みる。『ボードゥー』の校訂本はこれまでに3度刊行されているが、本稿では最新版にあたるジャック・シャルル・ルメール版[10]を底本として用いる。

2. ロベール・ド・ブロワの作品群

中世フランス文学史の中でロベール・ド・ブロワは、13世紀の「道徳

4） 拙稿「《伝記物語》の変容—ギヨーム・ル・クレール作『フェルギュス』をめぐって」、中央大学『仏語仏文学研究』第39号、2007年3月、25-67ページ。

5） 拙稿「《伝記物語》の変容（その2）—『グリグロワ』をめぐって」、中央大学『人文研紀要』第59号、2007年9月、47-80ページ。

6） 拙稿「『名無しの美丈夫』におけるゴーヴァン」、中央大学『仏語仏文学研究』第38号、2006年3月、77-91ページ。

7） 拙稿「《アーサー王物語》とクマの神話・伝承」、『中央大学経済学部創立100周年記念論文集』、2005年、531-549ページ（『イデール』については533ページおよび538-539ページ）。

8） 拙稿「クレチアン・ド・トロワ以降の古仏語韻文作品におけるゴーヴァン像」、篠田知和基編『神話・象徴・文学III』楽浪書院、2003年、481-518ページ（『メロージス・ド・ポールレゲ』については498-503ページ）。

9） 拙稿「3本目の剣を祖国に残すメリヤドゥック」—13世紀古フランス語韻文物語『双剣の騎士』を読む」、『続　英雄詩とは何か』中央大学出版部、2017年、197-232ページ。

10） *Baiudouz* de Robert de Blois, édition critique et traduction par J. Ch. Lemaire, Editions de l'Université de Liège, 2008. なお『ボードゥー』の最初の校訂本はチューリッヒ大学教授ヤーコプ・ウルリッヒ（Jacob Ulrich）が1889年に刊行したものであり、2つ目の校訂本はジゼル・アンドレ・ラマルク（Gisèle Andrée Lamarque）が1968年にノースカロライナ大学へ博士論文として提出して受理されたものである。

的・実践的教訓趣味」[11]を代表するトルヴェール（北仏詩人）として位置づけられている。ロベールの生涯は謎に包まれているが、作品の被献呈者の名が記されていることから、彼が詩人として活躍した場所や時期を特定できる[12]。

パリ・アルスナル図書館 5201 番写本（筆写は 13 世紀末）によると、ロベールは自作を北仏ピカルディー地方のポワ（Poix）の領主だったユー・ティレル（Hue Tirel）[13]とその息子ギヨーム（Guillaume）に献呈している。ユーとギヨームがポワの領主だった時期はそれぞれ 1230 年から 1260 年、1260 年から 1302 年である。ロベールはまた、ユー・ティレルがジョフロワ・ド・ラ・シャペル（Geoffroi de la Chapelle）の娘を妻に迎えたと記しているが、このジョフロワは王室のパン焼き所長官を務め、王室の裁判官としても活躍した人物である。

これに対してパリ・フランス国立図書館フランス語 2236 番写本（筆写は 15 世紀）には、ユー・ティレルとその息子ギヨームに代わって、フォルバック伯ティエリー（Thierry）とジャン・ド・ブリュージュ（Jean de Bruges）の名が被献呈者として記されている。このうちティエリーはおそらく 1241 年の文書で「フォルバック伯」と呼ばれ、1269 年に亡くなった人物である（フランス北東部に位置するフォルバックは、13 世紀初めにはメッス司教の管轄下にあった）。このようにロベール・ド・ブロワは

11） ドミニック・ブーテ＋アルマン・ストリューベル（神沢栄三訳）『中世フランス文学入門』白水社、1983 年、69 ページ。

12） ロベール・ド・ブロワの生涯については、ジョン・ハワード・フォックスの労作（J. H. Fox, *Robert de Blois, son œuvre didactique et narrative*, Paris, Nizet, 1948）の第 4 章を参照。

13） ティレル家の先祖には、イングランド王ウィリアム 2 世の死を招いたとされるゴーティエ・ティレル（Gautier Tirel）がいる。ウィリアム 2 世は 1100 年、ニューフォレストで狩りの最中、ゴーティエの放った矢を誤って受けて亡くなったと言われている。

自作を複数の人物に献呈しており、彼の活躍した時期は 13 世紀後半ということになる。

ロベール・ド・ブロワの特徴である道徳的・教育的な発想は、王侯に作法や教訓を説く『帝王学』（*Enseignement de Princes*）と女性に淑徳を勧める『婦女の訓戒』（*Chatoiement des dames*）という 2 冊の教訓書に認められる。ロベールはほかにも、2 編の宗教詩『三位一体について』（*De la Trinité*）および『この世の創造について』（*De la creation du monde*）、8 音節詩句約 350 行の『恋愛の歌』（*Chanson d'Amors*）と複数の歌謡集に収録されている数編の抒情詩、恋愛物語『フロリスとリリヨペ』（*Floris et Liriopé*）、そして本稿で注目するアーサー王物語『ボードゥー』を書き残している。

ロベール・ド・ブロワの作品群を伝える写本群は 3 種類ある[14)]。1 つ目はパリ・アルスナル図書館 5201 番写本（A 写本）[15)]およびパリ・フランス国立図書館フランス語 2236 番写本（C 写本）、2 つ目はパリ・フランス国立図書館フランス語 24301 番写本（N 写本）、3 つ目はパリ・アルスナル図書館 3516 番写本（B 写本）である。このうち『ボードゥー』は N 写本のみに収録されている。

3.『ボードゥー』を伝える写本

N 写本は、310 葉（620 ページ）からなる羊皮紙の写本で、各葉は縦 278 ㎜・横 191 ㎜で 2 つの欄に仕切られ、欄ごとに 36 行か 37 行の詩行が黒いインクで記されている[16)]。写本の筆写時期は A 写本と同じく 13 世

14） A. Micha, « Les éditions de Robert de Blois », *Romania*, 69, 1946, pp. 248-256.　なお以下で用いる写本の略号（A、B、C、N）は、フォックスが用いているものである（J. H. Fox, *op. cit.*, p. 35）。

15） P. Meyer, « Notice du Ms. de l'Arsenal 5201 », *Romania*, 16, 1887, pp. 24-72.

16） N 写本についての詳細は、ルメール版の序による（*Baiudouz*, éd. J. Ch.

紀末（13 世紀の最後の 3 分の 1）で、ロベール・ド・ブロワの死後に近い時期だと推測されている。

この写本には、5 種類の異なる作品に続いて、ロベール・ド・ブロワの作品群が収録されている。5 種類の作品とは順に、(1)『教父伝』(pp. 1-260)、(2)『アヴェ・マリア』(pp. 260-262)、(3)『クローヴィスからルイ 7 世までのフランス王の小年代記』(pp. 263-264)、(4)『イエス・キリストの受難』(pp. 265-298)、(5)『ドロパトス物語』(エルベールによるフランス語韻文訳)(pp. 299-474) である[17)]。

『ボードゥー』は N 写本の 475 ページから始まる。その冒頭で繰り広げられるボードゥーと母親との長い対話 (pp. 480b-484b) の直後に、宗教的な内容の詩数編 (pp. 484b-487b)、『帝王学』(pp. 487b-508a)、数編の宗教詩 (pp. 508a-520b)、『この世の創造について』(pp. 520b-526b)、『フロリスとリリヨペ』(pp. 527a-550b)、『婦女の訓戒』(pp. 550b-560b)、『恋愛の歌』(pp. 560b-565b) が挿入されている。写本はこの後『ボードゥー』に戻り、母から騎士に叙任された主人公がアーサー王宮廷へ出立する場面から大団円までを語っている (pp. 565b-620b)。つまり、『ボードゥー』はロベール・ド・ブロワの先行作品をまとめて紹介するための「枠物語」として使われており、『ロベール・ド・ブロワ全集』の観を呈している[18)]。そのため、これまでに刊行さ

Lemaire, *op. cit.*, pp. 11-18)。

17) このうち『ドロパトス物語』については、小栗友一「白鳥の子の物語—中世ラテン語の『ドロパトス』とその翻訳」、日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』第 30 号、1998 年、1-13 ページを参照。

18) F. Gingras, « Mise en recueil et typologie des genres aux XIIIe et XIVe siècles : romans atypiques et recueils polygénériques (*Biaudous, Cristal et Clarie, Durmart le Gallois* et *Mériadeuc*) », dans *Le recueil au Moyen Age : le Moyen Age central,* sous la direction de Y. Foehr-Janssens et O. Collet, Brepols, 2010, pp. 91-111 (ici p. 96).

れた『ボードゥー』の 3 種類の校訂本では、N 写本中『ボードゥー』の前半に挿入されている先行作品群を取り除いてテクストが復元されている点に注意する必要がある。

4.『ボードゥー』の梗概

『ボードゥー』は 1 行が 8 音節詩句で書かれた韻文物語であり、最後の部分は欠落しているが、現存の状態では 4564 行からなっている。『ボードゥー』の直前（p. 478a）でロベール・ド・ブロワは作品を「最良の友たちのうちの 1 人に」（'A un de mes meillors amis'）捧げているが、被献呈者の名は明かされていない。先述の通り、『ボードゥー』にはロベールの先行作品群が挿入されているため、『ボードゥー』を含むすべての作品が献呈の対象となっていると考えるべきだろう。なお写本は最後の 2 葉が失われており、ここに『ボードゥー』の結末部分と被献呈者の名が含まれていた可能性がある[19)]。被献呈者は、A 写本が記しているユー・ティレルとその息子ギヨーム、C 写本が記しているフォルバック伯ティエリーとジャン・ド・ブリュージュのうちの 1 人か、あるいはまったく別の人物かもしれない。以下ではルメール版に基づいて、『ボードゥー』の筋書きを詳細にたどることにしたい。なお便宜上エピソード区分を行い、それぞれに小見出しをつけた。

(1) プロローグ（vv. 1-88）

物語の主題はゴーヴァン[20)]の息子ボードゥーの武勇譚である。この作品で披露されるのは、トゥールの聖マルタン修道院[21)]で見つけたラテン語版

19) *Baiudouz*, éd. J. Ch. Lemaire, *op. cit.*, p. 12, note 31.

20) ゴーヴァンについては、フィリップ・ヴァルテール（渡邉浩司・渡邉裕美子訳）『アーサー王神話大事典』原書房、2018 年、183-185 ページを参照。

21) ロベール・ド・ブロワが『ボードゥー』の種本（ラテン語版）を見つけたと

をフランス語の韻文に移したものである。

（2）ボードゥーがアーサー王宮廷へ向けて出立する（vv. 89-476）

ある年の聖霊降臨祭[22]にアーサー王が宮廷を開いていたとき、ゴーヴァンの父逝去の報が届く。先王の家臣たちが王宮に来てゴーヴァンに王国の継承を求めたため、聖ヨハネ祭[23]にゴーヴァンの戴冠式が行われることになる。そこでアーサー王は聖ヨハネ祭にロンドンで2週間にわたって宮廷を開くことにし、すべての臣下に出席するようお触れを出す。その折にゴーヴァンは王として戴冠し、「ウェールズの貴婦人」を妻に迎えるという。

この知らせを伝え聞いたボードゥーは母（「ウェールズの貴婦人」）に、王宮へ向かう決意を述べる。すると母はそれを認めたうえで、ボードゥーにさまざまな助言を行う。さらに2つの楯を授け、名を聞かれたら「2つの楯を持つ騎士」と答えるようにいう。その後、母はボードゥーと32人の高貴な若者を騎士に叙任する。

（3）群島王の姫君の侍女との出会いと名剣オノレの獲得（vv. 477-738）

ボードゥーは12人の若者とともに王宮へ向けて出立し、4日目の朝に先を急ぐ高貴な乙女に出会う。豪華な身なりの乙女は白いラバにまたが

述べているトゥールの聖マルタン修道院は、アルクインが修道院長として晩年まで過ごしたことで中世期には有名だった。アルクインはイギリス・ヨーク出身の人文学者であり、カール大帝に招かれてフランク王国の教育・宗教行政の整備に尽力した。

22）「アーサー王物語」では、アーサー王が諸侯を集める宮廷を「聖霊降臨祭」（「復活祭」の50日後）に開催することが多い。12世紀と13世紀の古フランス語作品に見られる「聖霊降臨祭」への言及については、フィリップ・ヴァルテールの著書『時間の記憶』を参照（P. Walter, *La mémoire du temps. Fêtes et calendriers de Chrétien de Troyes à* La Mort Artu, Paris, H. Champion, 1989, p. 82）。

23）「聖ヨハネ祭」は洗礼者ヨハネの祝日であり、6月24日である。つまり「聖霊降臨祭」から数週間後にくる。

り、鞍の前には「オノレ」(「称えられた、名誉ある」の意)と呼ばれる名剣が吊り下げられていた。ボードゥーから助力を約束された乙女は、旅の目的を明かす。乙女は亡くなった群島王の姫君に仕える身であり、王は病床に就いていたとき、鞘から抜いた名剣を立派に使いこなせる者と娘を結婚させることを皆に誓わせていたという。

比類なき美女だった姫君との結婚を望んだマドワーヌ王が無理やり領土内に侵攻したため、姫君は臣下の助言にしたがって侍女をアーサー王の宮廷へ送った。しかし侍女は王宮で、剣を鞘から抜くことのできる勇者を見つけることができなかった(あいにく宮廷にはゴーヴァンが不在だった)。侍女の話を聞き、ボードゥーの仲間たちが剣を抜こうとして失敗した後、ボードゥーだけが試練に成功する。そこで使者の乙女はボードゥーこそが名剣オノレの所有者だと認め、姫君の救出を求める。

(4) 騎士エルマレユスとの一騎討ち(vv. 739-1391)

ボードゥーは同行してきた仲間たちに、王宮へ行って彼の到着を待つよう求める。ただし彼の到着まで、彼の国も名も明かさぬよう命じておく。侍女はともに出立したボードゥーから、「2つの楯を持つ騎士」と呼ばれていることしか教えてもらえないが、彼の立派な態度が気に入り信頼を寄せる。旅の途中で2人は、楯の掛けられた大木の前に至る。ボードゥーは大木から外した楯を持って近くの橋を渡り、草原の天幕にいた騎士に出会う。エルマレユスという名のその騎士はゴーヴァンの従兄弟で、オルカニー全域を治める王[24]の息子だった。エルマレユスは愛するモンタボール王の娘から、20人の騎士を決闘で倒すことができれば愛を与えると約束されたため、これまでに19人の名立たる騎士を倒していた。

24) オルカニーの支配者の名は作中で明かされてはいないが、おそらくロット王を指している。オルカニーについては、前掲書・ヴァルテール『アーサー王神話大事典』98ページを参照。

ボードゥーは名剣オノレに助けられ、エルマレユスとの壮絶な一騎討ちを制する。同行する乙女はボードゥーの力量を試すため、あえて武勇を誇るエルマレユスの待つ場所へやってきたことを明かす。翌朝エルマレユスは「2つの楯を持つ騎士」の捕虜としてアーサー王宮廷へ向かい、三位一体の祝日[25)]の3日前に王宮へ到着し、無敗を誇ってきた彼が初めて敗北を喫したことに誰もが驚く。

(5) ボードゥーがボーテの城に到着する（vv. 1392–2477）

群島王の姫君を我がものにしようとしていたマドワーヌ王は、恋敵となった「2つの楯を持つ騎士」の噂を聞くと嫉妬する。愛ゆえに憔悴しきったマドワーヌ王を心配した15人の臣下は、姫君の許へ向かう騎士を捕らえようと考える。マドワーヌ王は姫君の居城の1つタリス城の前に陣取り、姫君はそこから20里も離れていない別の城で多くの家臣とともにボードゥーの到着を待っていた。ボードゥーは単身で名剣オノレを手に、マドワーヌ王の15人の騎士たちと順に戦い、倒した12人の遺体を生き残った3人に命じて贈り物としてマドワーヌ王の許へ届けさせる。

ボードゥーは同行の乙女の案内で、姫君が攻囲されている城へ、敵軍には接近ができない岩山側から入る。ボードゥーの武勇を聞いた人々は、喜びのあまり楽の音を響かせる。侍女から使者を介して連絡を受けた姫君は夜の間に、100人の騎士を伴ってボードゥーの許へ向かい、お礼の言葉を伝える。姫君はボーテ（「美」の意）と名乗るが、身許を尋ねられたボードゥーは、騎士になって武具を授けられて以来「2つの楯を持つ騎士」と呼ばれていると答えるにとどめる。2人は互いの心が通いあっていることを確認し、食事後も夜遅くまで語りあう。

ボードゥーに同行してきたクレレット（ボーテの侍女）からゆっくり休

25）「三位一体の祝日」は、「聖霊降臨祭」後の最初の日曜日にあたる。したがってその3日前は、5月末か6月初めの木曜日ということになる。

むよう勧められたボードゥーは床につくが、暇を告げたボーテの顎をつかみ、誰にも気づかれぬよう口づけをする。その後、ボーテはクレレットと同じベッドで眠り、クレレットがボードゥーと出会い剣を鞘から抜いた経緯などについて聞き、ますます愛に燃える。

(6) ボードゥー軍とマドワーヌ軍との戦い (vv. 2478-3321)

朝になりミサに参列したボードゥーは、仲間の騎士たちに名誉のためマドワーヌ王と戦う覚悟を求める。ボードゥーはボーテからもらった白い袖を槍の幟につけ、500 人の騎士を伴って出撃する。敵軍は数の上で圧倒的に多数だったが、ボードゥーは先頭に立って仲間たちの士気を高める。戦いのさなかには、リュディス伯、ファリエ伯、パトリス公が率いる 3 つの部隊がボードゥーに加勢する。敵軍からは、騎士になってまだ 1 年も経っていなかったマドワーヌ王の甥モランが現れて活躍を見せたため、ボードゥーが対戦に向かう。いずれも落馬するがモランが落命したため、復讐を誓ったマドワーヌ王が出陣する。こうして戦いが再開され、やがてボードゥーがマドワーヌ王を落馬させ、王の馬をボーテの許に届けさせる。マドワーヌ王は仲間たちの許へ運ばれ、敵軍は恐怖におびえる。敵軍では 400 人が捕虜となり、600 人以上が戦死した。城側では死者と負傷者が 300 人を数えた。翌日には戦いの再開が予定されていたが、ボードゥーは双方にさらなる死者が出るのを望まず、王との一騎討ちを仲間たちに提案して認められる。

翌日、ボードゥーの使者がマドワーヌ王へ一騎討ちの提案をすると、王はそれを認め 2 週間後に一騎討ちが予定される。当日を迎えるとボードゥーとマドワーヌ王は、それぞれ証人となる 100 人の騎士を伴って戦いの場に現れる。ボードゥーは一騎討ちを制し、降参したマドワーヌ王は「2 つの楯を持つ騎士」の捕虜としてアーサー王の許へ向かうよう命じられる。

（7）マドワーヌ王がアーサー王宮廷に到着する（vv. 3322-3571）

マドワーヌ王は出立から６日目にモンタギュに到着し、アーサー王と面会する。マドワーヌ王は慣例通り、一騎討ちで敗れたままの身なりだった。そこに来ていたボードゥーの母（「ウェールズの貴婦人」）は、マドワーヌ王から「2つの楯を持つ騎士」のこれまでの活躍と、彼が連れてくる美しい群島王の姫君（ボーテ）の話を聞いて喜ぶ。また息子の消息がわからず心配していたゴーヴァンは、「ウェールズの貴婦人」から息子をアーサー王宮廷に送り出し、名声を得るまで本名を明かさず「2つの楯を持つ騎士」と名乗らせた経緯を聞いて安心する。今では宮廷の誰もが、「2つの楯を持つ騎士」がゴーヴァンの息子であることを確信していた。しかしアーサー王自身は自分の甥にあたるこの騎士に一度も会ったことがなかったため、次の宮廷を開く前に対面を望む。そこでゴーヴァンは息子を呼び寄せるため、キリスト昇天祭の５日後に馬上槍試合の開催を王に提案し、試合会場はガンセストル[26)]に決まる。

（8）ボードゥー一行が馬上槍試合に向けて出立する（vv. 3572-3699）

馬上槍試合開催の知らせを伝え聞いたボードゥーは、参加を仲間たちに告げる。パトリス公は、ボードゥーがボーテと結婚して国の領主となり、そのうえで馬上槍試合に参加したい者はボードゥーとともに出かけ、他の者はロンドンへ行ってボードゥーを待つことを提案する。ボードゥーは現時点では姫君と婚約するにとどめ、結婚は正式な形で行うつもりだと答える。そこで急いで旅支度が始まり、３日目にボードゥーは２人の伯爵、パトリス公、ボーテとその供回りの者を引き連れて出立する。

26）ガンセストル（Guncestre）はイングランドのウィンチェスターを指している（L.-F. Flutre, *Table des noms propres avec toutes leurs variantes figurant dans les Romans du Moyen Age écrits en français ou en provençal et actuellement publiés ou analysés*, Poitiers, Centre d'Etudes supérieurs de civilisation médiévale, 1962, p. 249）。

旅の途中で一行は、ロンドンから試合会場へ向かう若者に出会い、王妃[27]と「ウェールズの貴婦人」がロンドンに残り、アーサー王と試合の参加者がガンセストルに向かったと聞く。そこでボードゥーは試合の参加者以外全員をロンドンに送って彼の2重の楯を運ばせ、ボーテには「ウェールズの貴婦人」に彼からの挨拶を伝えるよう頼む。また近習の1人を先にガンセストルへ送り、宿と必要なものを用意させる。さらに2重の楯を1つ含む黒い楯を3つ作らせ、そのうち2重の楯を隠し、残り2つの楯を宿の入口に置くよう命じておく。

(9) ガンセストルでの馬上槍試合（vv. 3700–4445）

ロンドンに到着したボーテ一行は、雅な町人の邸宅に宿を得る。近習はその町人に、馬上槍試合後に「2つの楯を持つ騎士」がやってくること、ボーテがその婚約者であることを明かす。そこで町人は宮殿に向かい、「ウェールズの貴婦人」（ボードゥーの母）にボーテ一行の到着を伝える。その後、王妃と「ウェールズの貴婦人」は20人の騎士と20人の乙女を伴ってボーテの許を訪ねる。貴婦人はボーテと親しく会話を交わし、貴婦人の父はウェールズの王だったこと、「2つの楯を持つ騎士」は彼女の息子で本名はボードゥーであることを明かす。

この間にボードゥーは馬上槍試合に参戦した。試合には一方にポワトゥー勢、ノルマン勢、ウェールズ勢、フラマン勢、アイルランド勢が、反対側にブラバンソン勢、フランス勢、スコットランド勢、ブルトン勢が陣取り、アーサー王の臣下たちは後者側についた。ボードゥーとパトリス公はアーサー王の軍とは反対側の陣営に向かう。試合初日には、黒い楯をつけて戦ったボードゥーが身許を知られぬまま、名立たる騎士を少なく

27）『ボードゥー』では、主人公の母（「ウェールズの貴婦人」）と同じく、アーサー王の妃の名前も記されてはいない。「伝記物語」の系譜に属する『グリグロワ』でも、アーサー王の妃の名は伏せられている。

とも 30 人は倒し、その中にはサグルモール[28)]、ペルスヴァル・ル・ガロワ[29)]、サドックが含まれていた。ボードゥーは戦利品も捕虜も望まず、名誉だけを求めて戦った。試合後に宿に戻ったボードゥーは、身許を知られぬよう入口に白い楯を吊り下げ、黒い楯をしまっておく。アーサー王はこの騎士の捜索を命じたが、見つけられず残念に思う。

試合 2 日目にはまず、ボードゥーがクウ[30)]と湖のランスロ[31)]を相次いで落馬させる。試合が本格的に始まると、ボードゥーは夕方までにクリジェス[32)]、カログルナン[33)]、イヴァン[34)]、エレック[35)]を始めとする名立たる騎士 23 人に勝利する。その後ボードゥーは宿へ戻り、近習は黒い楯を隠しておく。前日と同じく、アーサー王は黒い楯の騎士の捜索を命じるが、なんの手掛かりも得られない。

試合 3 日目の朝、ボードゥーは騎士たちの宿へ向かい、その日は一度

28）「無鉄砲男」（ル・デスレエ）という異名を持つサグルモールについては、前掲書・ヴァルテール『アーサー王神話大事典』202-203 ページを参照。

29） ペルスヴァルについては、前掲書・ヴァルテール『アーサー王神話大事典』335-337 ページを参照。『ボードゥー』にはペルスヴァルの恋人「ボール・ペールの乙女」への言及が見られるが、この女性はクレティアン・ド・トロワ作『グラアルの物語』に登場するブランシュフルールに対応する人物である。

30） アーサー王の執事騎士クウについては、前掲書・ヴァルテール『アーサー王神話大事典』150-152 ページを参照。

31） ランスロについては、前掲書・ヴァルテール『アーサー王神話大事典』405-407 ページを参照。

32） クリジェスについては、前掲書・ヴァルテール『アーサー王神話大事典』170 ページを参照。

33） カログルナンについては、前掲書・ヴァルテール『アーサー王神話大事典』126 ページを参照。『ボードゥー』ではカログルナンがイヴァンの「甥」という設定であるが、クレティアン・ド・トロワ作『イヴァン』のカログルナンはイヴァンの「従兄弟」である。

34） イヴァンについては、前掲書・ヴァルテール『アーサー王神話大事典』51-53 ページを参照。

35） エレックについては、前掲書・ヴァルテール『アーサー王神話大事典』83-84 ページを参照。

対戦したら出立するつもりであることを伝える。2 重の楯をつけたボードゥーの対戦相手となったのは、父のゴーヴァンだった。2 人は馬上のまま激突していずれも落馬し、互いの身許を知らぬまま相手の強さに驚く。やがて楯を目にした人たちがアーサー王とゴーヴァンに「2 つの楯を持つ騎士」がボードゥーであることを告げ、馬上槍試合はすぐさま終了となる。アーサー王は朝のうちに供回りの者たちを連れてロンドンへ向かったが、ボードゥーは一足先にロンドンの宿へ到着した。

（10）一同の再会と大団円（vv. 4456-4564）

アーサー王一行は翌日、ロンドンに到着する。ボードゥーの居場所を知らぬゴーヴァンは王妃の侍女アミに、馬上槍試合で活躍したボードゥーが誰も知らぬうちに出立したと告げる。そこでアミは婚約者がすでに到着している以上、ボードゥーの到着も近いと答える。そこへボードゥーの消息がわからず悲しんでいたアーサー王が来たため、王を慰めるためにボーテが呼び出されそうになる。しかしボードゥーはすでに内密にボーテを宿に呼びよせており、ボーテは 40 人の騎士をアーサー王に遣わして一行の到着を知らせる。

ボードゥーの到着が伝わり、人々が集まってくる。ボードゥー一行はアーサー王の御前に到着し、200 人ほどの騎士が同行した。そこへ王妃と侍女アミも合流する。ボードゥーが広間に入ると、まずは母が歓迎する。次にアーサー王が彼を腕に抱き、7 回以上キスする。ゴーヴァンは息子をそっと腕に抱く。王妃もこのうえない喜びを示す。ウェールズからボードゥーと一緒に来ていた仲間たちは、馬上槍試合でのボードゥーの活躍を知って驚く。

ボードゥーが宮廷に着くと、アーサー王を始めとして誰もが喜ぶ。そこにはボードゥーが捕虜として送り届けていた騎士たちもいた。王は捕虜を全員解放し、宮廷が終わるまで留まらせた。ゴーヴァンは息子と自分の戴

冠式の準備を行う。

5. 先行作品との接点

13 世紀半ばから後半にかけてロベール・ド・ブロワが著した『ボードゥー』を、12 世紀後半以降に古フランス語韻文や散文で書き継がれてきたアーサー王物語群の中に位置づけてみると、『ボードゥー』が数多くのモチーフやエピソード群を先行作品と共有していることがわかる。ここではクレティアン・ド・トロワの物語群[36]や「伝記物語」に属する作品群との比較により、ロベール・ド・ブロワが『ボードゥー』の創作にあたって「アーサー王物語」の伝統を踏襲しながらも独自性を打ち出している顕著なケースを検討する。

(1) 母が息子に与える助言

『ボードゥー』の冒頭で、ボードゥーはアーサー王が聖ヨハネ祭に開催予定の宮廷への出席をすべての臣下に命じたという知らせを伝え聞き、円卓騎士団の許で学ぶために王宮へ向かう決意を述べる。そして母がボードゥーに一連の助言を授ける。この場面は、クレティアン・ド・トロワ作『グラアルの物語』[37]の冒頭を想起させる。

『グラアルの物語』の冒頭では、森の中で初めて騎士たちと対面したペルスヴァルが母の館へ戻り、自分を騎士にしてくれる王の許へ向かう決意を述べると、母は息子をこれ以上館にとどめておけないと悟る。そして別

36) クレティアン・ド・トロワの物語群からの引用には、1994 年にガリマール出版から刊行されたプレイヤッド版『クレティアン・ド・トロワ全集』(D. Poirion, (dir.), *Chrétien de Troyes, Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1994) を用いる。

37) 『グラアルの物語』の引用には、前掲書『クレティアン・ド・トロワ全集』所収、ダニエル・ポワリヨン (Daniel Poirion) による校訂本を用いる。

れのときに、

« Biaus filz un san vos vuel aprandre
Ou il vos fet mout bon antandre ;
Et s'il vos plest a retenir,
Granz biens vos an porra venir.（vv. 527-530）

「美しい息子よ、1つ教えておきたいことがありますから、しっかりと聞いておくのですよ。そして、よく覚えておいたら、とても役に立ちますから。

と述べて、慌ただしく3つの助言を授けている（vv. 531-598）。

1）助けを必要としている貴婦人や途方に暮れる乙女に援助の手を差し伸べること。

2）街道や宿で道連れができたら、かならず相手の名前を尋ねること。

3）教会や僧院へ行って、我らの主イエス・キリストにお祈りを捧げること。

そもそも母はペルスヴァルを騎士道から遠ざけるために、人里離れた「荒れ森」で暮らしていた。騎士だったペルスヴァルの兄2人が戦死し、父が長男と次男を失った悲しみで亡くなっていたからである。ペルスヴァルはこのように母が語った一門の悲劇の話に、ほとんど耳を傾けることはなかった。またペルスヴァルは出立直後に、母が後方の橋のたもとで倒れて意識を失う姿を見かけながらも、そのまま全速力で馬を進めてしまう。母がこのときに亡くなったことは、『グラアルの物語』後半で、ペルスヴァルの伯父にあたる森の隠者の話から明らかになる。

これに対して『ボードゥー』では、出立前のボードゥーに対し、母は落ち着いて複数の助言を与えている。助言には内容上の重複が見られるが、詩行のまとまりごとに以下で列挙することにする。

1）寛大さを見せること、武勇を発揮して名誉を手にするよう努めること。（vv. 179-215）

2）名を尋ねられたら答えること。嘘をつくことは恥ずべきことであるが、2つの楯を結びつけて持っていれば、名を尋ねられて「2つの楯を持つ騎士」と答えても嘘をついたことにはならない。（vv. 219-250）

3）名誉を手にし、皆から愛されるよう努めること。また話をしたり歌ったりするときには、中庸を保つこと[38]。（vv. 251-278）

4）友人たちに愛情を示すこと。高貴な人々に敬意を表すること。美しい装身具を手にしたら、身分に応じて分かち与えること。（vv. 279-310）

5）1日に1時間の恥は、40年分の名誉を奪うことになるので、恥を恐れるべきこと。悪しき名声はすぐに消えることはない。助言を聞いてもそれを覚えて実行に移さなければ意味がない。知性がなければ、大事な話も耳の中を素通りしてしまう[39]。良識は体と魂を守ってくれる。（vv. 311-

38） シンクレアが指摘するように、ロベール・ド・ブロワは「会話や歌では中庸を保つべし」という助言を『婦女の訓戒』の中でも行っている（F. Sinclair, “Defending the Castle : Didactic Literature and the Containment of Female Sexuality”, *Reading medieval studies*, 22, 1996, pp. 5-19, especially p. 15）。

39） フォックスが指摘する通り（J. H. Fox, *op. cit.*, p. 50）、ボードゥーの母の助言のうち「大事な話にはしっかり耳を傾けるべきだ」という助言は、クレティアン・ド・トロワ作『イヴァン』の冒頭部分を想起させる。それは騎士カログルナンがかつて経験した失敗談を、円卓騎士団の前で披露する場面である。カログルナンは話を始めるにあたり、言葉が耳を通って心に入っていくとき、心に捉える準備ができていなければ、言葉は立ち去ってしまうと述べ、仲間たちの注意を喚起している（前掲書『クレティアン・ド・トロワ全集』所収、カール・ウィッティ（K. D. Uitti）による校訂本『イヴァン』vv. 142-172）。このように作中世界でカログルナンが仲間たちに求めている聴衆の取るべき姿勢

390）

6）賢明な人々が望むのなら、助言を与えること。邪悪な人が持つ知恵と、地下に眠る財宝は、この世でまったく価値のない２つのものである。（vv. 391-438）

7）神を愛し、神に仕え、神を称えること。1 日に少なくとも 2 度は教会へ行き、神に祈りを捧げること。神を愛する者は天国で、5 つの宝石からなるとても価値のある冠を授けられる。（vv. 439-471）

このうち２つ目の名前に関する助言と、7 つ目の神への祈りに関する助言は、ペルスヴァルの母の助言のうち２つ目と３つ目に対応している。さらにボードゥーの母の助言の中の３つ目の冒頭部分は、

> Biaus fiz, fait ele, encor te vuel
> Un bel sen dire : (...)
> Pense, biauz fiz, del retenir :
> Grans honors t'en puet avenir. (vv. 251-256)
> 美しい息子よ、と彼女は言う、もう 1 つ大事なことを教えておきたいの。（中略）美しい息子よ、それをしっかりと覚えておけば、大いなる名誉が手に入りますよ。

となっており、ペルスヴァルの母が助言を授ける冒頭部分と酷似している。このことからもロベール・ド・ブロワが『グラアルの物語』の冒頭を

は、中世期の貴族のサークルで実際に物語が朗読された際に聴衆が遵守すべきエチケットを推測させるものとなっている。この問題については、拙稿「《短詩》から《ロマン》へ―《ブルターニュの素材》における口承性をめぐって」、中央大学『人文研紀要』第 50 号、2004 年、73-100 ページ（特に 84-85 ページ）を参照。

十分に踏まえたうえで、母の助言に道徳的・教育的な内容を多く盛りこんだと言えるだろう[40]。

一方で『ボードゥー』と『グラアルの物語』には顕著な違いも認められる。ペルスヴァルの母が「人里離れた荒れ森に住む、やもめの貴婦人」（'la veve dame / De la Gaste Forest soutainne', vv. 74-75）であるのに対し、ボードゥーの母は「権勢を誇る美貌の、ウェールズの姫君」（'la pucele / De Gales, la riche, la bele', vv. 147-148）である。またペルスヴァルの母は息子を騎士道から遠ざけようと努めていたのに対し、ボードゥーの母は息子の王宮行きを認めるだけでなく、息子とその仲間になる 32 人の若者たちをみずからの手で騎士に叙任している[41]。ボードゥーの結婚相手となるボーテが「群島」王の娘という設定には、かつて「群島」のどの島でも立派な騎士として敬われていたペルスヴァルの父と、同じく「群島」で最も優れた騎士の家柄だったというペルスヴァルの母の記憶が見え隠れしているが、ボードゥー自身はゴーヴァンの息子であり、『ボードゥー』自体も『グラアルの物語』の続編というわけではない。

さらに母親から助言を授けられた息子の反応も、これら 2 作品では大

40） ロリ・ウォルターズは、ボードゥーの母が授ける助言に、ギヨーム・ド・ロリスによる『薔薇物語』前編で「愛の神」が披露する 10 の掟の影響を想定している（L. Walters, "'A Love That Knows No Falsehood' : Moral Instruction and Narrative Closure in the *Bel Inconnu* and *Beaudous*", *South Atlantic Review*, 58-2, 1993, pp. 21-39, especially p. 27）。なお『薔薇物語』で「愛の神」が列挙する掟は順に、1）「下賤」の排除、2）中傷を避けること、3）礼節の勧め、4）正しい言葉遣い、5）女性への奉仕、6）みずからの高慢を戒めること、7）優雅の勧め、8）常に快活であること、得意なことはためらわず披露すること、9）気前良さの勧め、10）心をただ 1 つの場所（1 人の相手）に集中させること、である（ギヨーム・ド・ロリス／ジャン・ド・マン、篠田勝英訳『薔薇物語（上）』ちくま文庫、2007 年、97-108 ページ）。

41） レオン・ゴーティエが指摘するように、中世期には女性による騎士叙任は珍しいことではなく、武勲詩にも例が見つかる（L. Gautier, *La Chevalerie*, Arthaud, 1959, pp. 133-134）。

きく異なっている。ボードゥーが「母の言ったことをすべて、自分の心の中に刻んだ」（'Dedens son cuer met en escrit / Tout ce ke la mere li dit.', vv. 483-484）のに対し、ペルスヴァルは母が語る一族の悲劇にほとんど耳を傾けなかった[42]。以上の点からロベール・ド・ブロワは、アーサー王宮廷に向けて出立するペルスヴァルの姿を反転させ、「反ペルスヴァル」としてボードゥー像を作り出したのかもしれない[43]。

（2）ボードゥーという固有名

『グラアルの物語』の冒頭には、「ボードゥー」（古フランス語の綴りでは Beaudous, Biaudos, Biaudous, Biaudouz, Biausdous）という固有名の成立の謎を解く件が含まれている点にも触れておきたい。「やもめの貴婦人」が助言を授ける場面にはペルスヴァルを指す「美しい息子」（Biax filz）という呼称が 11 箇所[44]に出てくるが、一度だけ「美しくて優しい息子」（Biax dolz filz, v. 408）と呼びかけている箇所がある。この呼称の中で「息子」を修飾している 2 つの形容詞（「ボー（美しい）＋「ドゥー（優し

42） 純朴な少年ペルスヴァルが見せた愚直さを示す表現形式については、拙著『クレチアン・ド・トロワ研究序説―修辞学的研究から神話学的研究へ』中央大学出版部、2002 年、87-90 ページを参照。

43） F. Gingras, *art. cit.*, pp. 97-98.

44） 「美しい息子」と母がペルスヴァルに呼びかける場面は、以下の詩行に出てくる（v. 373, v. 374, v. 388, v. 396, v. 413, v. 418, v. 511, v. 527, v. 557, v. 563, v. 617）。このほかに母が「息子」（Filz, v. 532）と呼びかける箇所が 1 つある。「美しい息子」という呼称には、息子を常にそばにとどめておこうとする母の気持ちがこめられているが、騎士たちに出会った直後にペルスヴァルが母と交わした会話では「美」をめぐる哲学的な問題とも関連している（前掲書『クレティアン・ド・トロワ全集』p. 1328、ダニエル・ポワリヨンによる『グラアルの物語』p. 694 への注 3）。なぜなら、母は常々この世に天使と神ほど「美しい」ものはないとペルスヴァルに教えていたが、それを基準にしてペルスヴァルは目撃したばかりの「この世でもっとも美しいもの」（'Les plus beles choses qui sont', v. 391）（＝騎士たち）を神や天使よりも「美しい」と考えたからである。

い、穏やかな)」)を用いてロベール・ド・ブロワが「ボードゥー」という固有名を作り出した可能性は十分にあるのではないだろうか[45)]。

『ボードゥー』の作中世界では、主人公は「2つの楯を持つ騎士」という異名で呼ばれており、結婚相手となるボーテ(Beauté、「美」の意)が「ウェールズの貴婦人」(ボードゥーの母)から正式にボードゥーという本名を明かされるのは、2人がロンドンで初めて対面したときのことである。貴婦人が、

> Qu'il est mes fiz : c'est apelez
> Biaudouz, tot le voir en savez. (vv. 3787-3788)
> というのも彼は私の息子で、ボードゥーと呼ばれています。このことについてあなたは本当のことをすべてご存知ですね。

と述べると、ボーテは、

> -Onkes mais certes je ne sou,
> Fait cele, ne savoir ne pou
> De lui ne de son nom je plus
> Fors 'chevaliers as douz escus'. (vv. 3789-3792)
> 確かに私はと、彼女は言った。彼のことも、彼の名前のことも、『2つの楯を持つ騎士』という名のほかには知りませんでしたし、知るよしもありませんでした。

45)『イヴァン』には、ゴーヴァンが新婚のイヴァンに騎士としての本分を忘れないために、冒険の旅へともに出立するよう促す箇所で、イヴァンに「美しくて優しい友よ」('biax dolz conpainz', v. 2531)と呼びかける箇所がある。この呼称にも「ボー(美しい)」と「ドゥー(優しい)」という2つの形容詞が含まれている。

と答えている。ところがボーテは、初対面のボードゥーから、騎士になって初めて武具を受け取って以来「2つの楯を持つ騎士」の名で呼ばれていると言われたとき、微笑みながらこう述べていた。

(...) Sire, par foi, je cuit
Qu'ansois eüstes autre nom,
Et s'on vos voloit par raison
Nomer, tant estes biaus et dous,
Bien dussiez avoir nom Biausdoz. (vv. 2289-2293)

騎士の方、確かにあなたには前に別の名前があったと思います。ですので、もし正しくあなたの名前を呼ぼうとするのでしたら、ボードゥーという名前をお持ちのはずですわ。それほどあなたは美しく(ボー)、穏やか(ドゥー)だからです。

このようにボーテは初対面で「2つの楯を持つ騎士」の本名を見事に言いあてているが、この箇所からわかるようにボードゥーの名は、ペルスヴァルの母が用いた呼称に含まれていた2つの形容詞の組み合わせからなっている。後に「ウェールズの貴婦人」からボードゥーの本名を聞いたとき、ボーテはこのときのことをすっかり忘れてしまったのか、あるいはあえて心にとどめておいたのかもしれない。

(3) 名剣オノレを鞘から抜く試練

「2つの楯を持つ騎士」として12人の仲間たちとともに出立したボードゥーが、道中でボーテの侍女クレレットと出会い、クレレットの白いラバの鞍の前に吊り下げられていた名剣オノレ(Honoree, v. 660)を鞘から抜くのに成功する場面については、13世紀前半の作とされる『双剣の騎

士』[46]に先行例が見つかる。それは両親を亡くしてカラディガンの唯一の跡取りとなっていた姫君が、「荒廃した礼拝堂」で手に入れ自分の脇につけていた剣を外すことのできる勇者を夫に迎えるべく、カルデュエルのアーサー王宮廷に向かう場面である[47]。

王宮では最初にクウ、イヴァン、ドディネルが順に姫君の剣を外そうとするが失敗に終わり、翌日には宮廷に集っていた 366 人の騎士を始めとした多くの騎士が同じく試練に失敗する。宮廷にはゴーヴァン、ジフレ、トールの 3 人が不在だった。するとゴーヴァンの近習を務めていた、22 歳ほどの大柄で美貌の若者がアーサー王の御前に赴き、騎士叙任を求めて認められ、王から剣を授かる。その後、若者は「カラディガンの姫君」をテーブルに登らせ、みずからは馬上のまま姫君の剣の帯革をつかんで難なく解き、剣を外して身につけると、何も言わずに宮廷を後にする。自分の本名を知らなかった若者はその後「双剣の騎士」と名乗り、数々の試練の果てにメリヤドゥックという本名を知り、最終的には「カラディガンの姫君」（本名はロール）と結婚して幕となる。

『ボードゥー』の主人公は帯革を解いて剣を外すのではなく、剣を鞘から抜いているが、こうした剣の試練の詳細を別にすれば、エピソードの大筋は『双剣の騎士』とよく似ている。群島王の姫君ボーテの侍女クレレットが、最初にアーサー王宮廷を訪ね、剣を鞘から抜くことができるほど勇気ある者を探したが見つからず、あいにくゴーヴァンが王宮に不在だった

46）『双剣の騎士』のテクストは、ロックウェルの校訂本による（P. V. Rockwell (ed.), *Le Chevalier as deus espees*, Woodbridge, Brewer, 2006）。

47）「カラディガンの姫君」が「荒廃した礼拝堂」で、後に主人公のものとなる剣を手に入れる経緯については、以下の拙稿でも分析した（K. Watanabe, « Les rites funéraires dans les romans arthuriens en vers des XIIe et XIIIe siècles », *Mythes, rites et émotions. Les Funérailles le long de la Route de la soie* (sous la direction d'A. Caiozzo), Paris, Honoré Champion, 2016, pp. 51–71, ici pp. 68–69）。

という『ボードゥー』の筋書きは『双剣の騎士』と共通しており[48]、剣の試練に主人公ボードゥーだけが難なく成功し、剣の試練の帰結が姫君との結婚である点も同じである。

さらには、ボードゥーが身許を隠すために「2つの楯を持つ騎士」としてアーサー王宮廷に向かい、以後大団円に至るまでこの異名で呼ばれ続けることも、「双剣の騎士」メリヤドゥックと共通している。ただし「2つの楯を持つ騎士」という異名については、ジョン・ハワード・フォックスのように、『双剣の騎士』ではなくクレティアン・ド・トロワ作『グラアルの物語』の影響を指摘する研究者もいる[49]。『グラアルの物語』の後半には、タンタジェルの城に到着したゴーヴァンが、1本の楡の木の下で馬から下り、2つの楯を枝に吊るす場面が出てくる。城ではまもなく馬上槍試合が始まることになっており、見物席についていた貴婦人や乙女たちが、ゴーヴァンの具足一式と2つの楯を見つけて好奇心をそそられる。2人の騎士がやってきたと噂する人々がいる中で、ある女性はこう述べている。

« Dex, sire, icist chevaliers
A tant hernois et tant destriers
Que asez an eüssent dui,
N'il n'a chevalier avoec lui.
Que fera il de deus escuz ?
Tex chevaliers ne fu veüz
Qui portast deus escuz ansamble. »（vv. 4971-4977）

48） ただし『双剣の騎士』では、姫君の侍女ではなく、姫君本人が剣を携えてアーサー王宮廷を訪ねている。

49） J. H. Fox, *op. cit.*, p. 48.

「主なる神さま、あの騎士はたくさんの具足や馬を持っています。2人分は十分にありますね。それなのに連れの騎士がおりません。あの人は2つの楯をどうするのでしょう。2つの楯を持った騎士なんて見たことがありません。」

この馬上槍試合は、ティエボー・ド・タンタジェルの姉娘が、彼女を愛するメリヤン・ド・リスの活躍を確認するために開催されたものだった。ゴーヴァンは、見物席から彼の姿を認めたティエボーの妹娘「小袖姫」からの依頼を受けて代理騎士となり、馬上槍試合ではメリヤン・ド・リスに勝利する。このエピソードに出てくる2つの楯が、ボードゥーの異名に使われた可能性も十分にあるだろう。

(4) エルマレユスとモンタボール王の娘

名剣オノレを獲得してボーテの救出に向かったボードゥーに初めて武勇を見せる機会を提供したのは、円卓騎士団の一員だった騎士エルマレユスである。父はオルカニーの支配者で、ゴーヴァンの従兄弟にあたる勇者だった。エルマレユスはモンタボール王の姫君に何度も愛を懇願し断られていた。しかし姫君はエルマレユスが20人の騎士を決闘で倒せば愛を与えることを約束したため、名誉を求めて遍歴する勇敢な騎士たちが通過する場所に陣取り、すでに19人の優れた騎士を倒していた。しかしエルマレユスは20人目の対戦相手にあたるボードゥーとの戦いに敗れ、捕虜としてアーサー王宮廷に送られる。

姫君がエルマレユスの愛の懇願を断った件では語り手が、武勇に優れた彼は姫君の愛を得る価値が十分にあり、「姫君は心の奥底では彼のことをとても好んでいたと思う」(‘Je croi q’au cuer trop fort li plaise’, v. 896) と述べ、貴婦人というのは自分の望むことについて気まぐれをおこすことが

多いと付言している。1 人称による語り手のコメントが姫君の真意だとすれば、姫君はエルマレユスに対して好意を持ちながらも、あえて武勇の証拠を求めたことになる。先述した『グラアルの物語』後半に出てくるティエボー・ド・タンタジェルの姉娘はまさしく、恋人のメリヤン・ド・リスに対して同じ振舞いをしていた。

さらにクレティアン・ド・トロワの作品群では、現存第 1 作『エレックとエニッド』の一連の冒険を締めくくる、「宮廷の喜び」の冒険がエルマレユスとモンタボール王の娘のエピソードを想起させる。それはエヴラン王の居城ブランディガンが舞台となる冒険で、城内には空気の壁に取り囲まれた庭園があり、周囲には兜をつけたままの騎士たちの生首が掛けられ、最後の 1 本には角笛が掛けられていた[50)]。エレックは庭園の番人マボナグランを一騎討ちの末に破り、角笛を吹いて魔法を解除する。庭園はエニッドの従姉妹にあたる女性が、恋人のマボナグランを常に傍らに置いておくために考案された場所だった[51)]。

『ボードゥー』では、エルマレユスがある泉の前にそびえる大木に楯を吊るし、勇者との対戦を続けていたが、楯には金文字で「ここから我をあえて外そうとする者には、大きな不幸が降りかかるだろう。我はここに 15 年かそれ以上吊り下ってきたが、誰一人として我をあえて外すことはなかった」(« Qui de ci oster m'ozera, / Grans encombriers l'en avandra. /

50）「宮廷の喜び」の冒険の舞台となる庭園については、拙稿「《アーサー王物語》における《異界》―不思議な庭園とケルトの記憶」（細田あや子・渡辺和子編『異界の交錯（上巻)』リトン、2006 年、127-148 ページ）を参照。

51） 中世期の女性が果たした役割について考察したジョーン・フェランテは、女性が「隠された約束」を用いて恋人を意のままに操る例として、「宮廷の喜び」の冒険を例に挙げている（J. Ferrante, « Public Postures and Private Maneuvers : Roles Medieval Women Play », *Women and Power in the Middle Ages*, Edited by M. Erler and M. Kowaleski, The University of Georgia Press, 1988, pp. 213-229, especially p. 216）。

Quinze ans i ai pendu ou plus, / C'onques ne m'osa oster nuns. », vv. 809-812）と記されていた。エルマレユスは、楯の掛けられた大木の前を流れる川を越えたところにある草原に天幕を構えて、挑戦者を待ちわびていた。流れの激しい川には、石橋が掛けられていた。つまりエルマレユスはこの草原ですでに「15 年かそれ以上」試練に耐えていたのであり、この場所は先述した「宮廷の喜び」の冒険に登場する空気の壁に取り囲まれた庭園と同じく、モンタボール王の姫君の利己的な愛を象徴する隔絶された空間だと言えるだろう。

『ボードゥー』と同じく「伝記物語」の系譜に属する『名無しの美丈夫』にも、類似したエピソードが見つかる[52)]。12 世紀末から 13 世紀初めにかけてルノー・ド・ボージューが著したこの物語は、騎士としての経験がない若者ガングランが、一連の冒険を通じて公に認められるまでを描いた物語である。冒険の途上でガングランは、「黄金島」と呼ばれる要塞都市に至る。高くそびえ立つ堅固な塔に固められた都市の一方は入江に囲まれ、もう一方は海に面していた。城塞都市へ入るには橋を渡る必要があったが、橋に通ずる土手道には大きな天幕が張られていた。この天幕の前には、生首が刺さった杭が 143 本あった。城主の一人娘「白い手の乙女」に恋する「灰色のマルジエ」が、5 年間に王侯貴族の命を奪った証である。マルジエはあと 2 年番人を務めあげれば、「乙女」を妻に迎えられることになっていた。マルジエは勇猛な騎士だったが、凶暴かつ邪悪な彼を「乙女」は嫌っていた。ガングランは激戦の末にマルジエを殺め、「乙女」を妻にする権利を得る。

『名無しの美丈夫』の「黄金島」エピソードでは、「白い手の乙女」が結

52） Renaud de Beaujeu, *Le Bel Inconnu*, publié, présenté et annoté par M. Perret ; traduction de M. Perret et I. Weil, Paris, Honoré Champion, 2003, vv. 1870-2492.

婚の条件として「灰色のマルジエ」に7年間番人を務めあげる試練を課したが、「乙女」はマルジエに対して愛情はまったく抱いておらず、ガングランに愛情を寄せた。それでも「乙女」が求婚者マルジエに課した試練とその舞台は、『エレックとエニッド』の「宮廷の喜び」の冒険のみならず、『ボードゥー』でエルマレユスが騎士との対戦を強いられるエピソードと類似している。ロベール・ド・ブロワが『ボードゥー』の創作にあたって用いた典拠の中に『名無しの美丈夫』が含まれていたかどうかはわからないが、ボードゥーとガングランが2人ともゴーヴァンの息子であり、いずれも姫君の侍女に先導され、最終的には危難から救い出した姫君と結婚するという筋書きを共有している点は注目に値する。

(5) 3日間の馬上槍試合

『ボードゥー』の後半では、主人公との一騎討ちで敗北を喫したマドワーヌ王が捕虜としてアーサー王宮廷に向かい、一同を前に「2つの楯を持つ騎士」の武勇について話す。するとアーサー王はいまだに会ったことのない甥ボードゥーとの面会を望み、ゴーヴァンの提案に従って馬上槍試合を開催することでボードゥーを呼び寄せることにする。馬上槍試合開催の知らせを受けたボードゥーは、皆に身許を知られることなく、3日間の馬上槍試合に参加して一番の活躍を見せる。初日にはサグルモール、ペルスヴァル、サドック、2日目にはクウ、ランスロ、カログルナン、イヴァン、エレックを倒し、3日目には父のゴーヴァンと互角の戦いを見せる。このエピソードは、クレティアン・ド・トロワの現存第2作『クリジェス』後半に見られる、オックスフォードでの4日間の馬上槍試合のエピソードを想起させる[53)]。

53) このエピソードについては、前掲拙著『クレチアン・ド・トロワ研究序説』第III部第4章で、神話学的な立場から分析を試みた。

『クリジェス』は、コンスタンティノープル皇帝アレクサンドルの息子クリジェス、叔父アリスとその妻フェニスとの三角関係を描いた物語である。明らかに「トリスタン物語」を意識して書かれた『クリジェス』では、死においてしか結ばれないトリスタンとイズーとは異なり、クリジェスとフェニスはアリスの憤死によりハッピーエンドを迎えている。この物語の中盤には、アリスとフェニスの結婚後にクリジェスが亡き父の忠告を思い出し、己の価値を高めるべくアーサー王宮廷に赴くために海へ渡り、オックスフォードでの馬上槍試合に参加するエピソードがある。

試合の参加に先立ち、クリジェスはまず3人の近習をロンドンへ送り、黒、紅、緑の3組の異なる甲冑を手に入れさせ、彼が騎士に叙任されたときにもらった白の甲冑とともに隠しておく。試合初日にクリジェスは黒の甲冑を身につけてサグルモールと戦い、相手を落馬させる。その後も大活躍を見せたクリジェスは宿に戻ると、黒の甲冑を隠し、宿の入口には緑の甲冑を出しておく。2日目には緑の甲冑をまとったクリジェスは対戦相手のランスロを落馬させる。その日は前日の2倍の名誉を獲得して宿に戻り、宿の入口には紅の甲冑を出しておく。3日目には紅の甲冑をまとったクリジェスがペルスヴァルに勝利し、宿に戻ると白い甲冑を外へ出しておく。この日になってようやく試合の参加者たちは、連日一番の活躍をした者が同一人物だと気づく。最終日にクリジェスは白い甲冑をまとって、ゴーヴァンと互角の戦いを見せるものの、アーサー王が2人の戦いをやめさせて友情を結ばせる。その後、宮廷での食事の折にクリジェスは自分の身許を明かしている。

このように「4日間」の馬上槍試合でクリジェスは、円卓騎士団の名立たる騎士のうち、最初の3日間でサグルモール、ランスロ、ペルスヴァルと順に対戦して勝利し、最終日にはゴーヴァンと互角の勝負を演じている。『ボードゥー』では馬上槍試合の日数が「3日間」となっているが、

初日にサグルモールとペルスヴァル、2日目にはランスロだけでなくクリジェスも倒し、3日目にはゴーヴァンと互角の戦いを行い、ここでもアーサー王が戦いをやめさせている。『クリジェス』では主人公が毎日色の異なる甲冑を身につけて戦っているのに対し、『ボードゥー』の主人公は「いずれにも白い百合の花が描かれた」('en chascun point une flor / Blanche de lis', vv. 3689-3690)「すべて黒い色の頑丈な楯を3つ」('trois fors escuz, (...) / Et tuit d'une noire color ;', vv. 3686-3688) を使っている(ただし最終日には2重の楯が用いられた)。このように楯の色については違いが認められるが、クリジェスとボードゥーがいずれも身許を隠して戦い、最終的にアーサー王とその臣下たちに武勇を認められる点は共通している。『ボードゥー』では、馬上槍試合の最終日に出てくるゴーヴァンは、円卓騎士団の筆頭騎士として新世代の騎士の力量を測るための「試金石」であり、自分の息子の武勇をみずから確認する役割を演じていることになる。

6. おわりに

古フランス語韻文でゴーヴァンの息子の「幼少年期」を語った『ボードゥー』は、本稿での分析から明らかなように、典型的な「伝記物語」である。ロベール・ド・ブロワは、クレティアン・ド・トロワの作品群を始めとした先行作品からモチーフやエピソード群を借り受けながら、独自の物語を紡ぎあげている。ゴーヴァンの息子を主人公とした作品としてはルノー・ド・ボージュー作『名無しの美丈夫』が先行例として存在するが、ロベールは新たにボードゥーという名の主人公を生み出している[54)]。ちな

54) 『ボードゥー』には主人公の名のほかにも、この作品にしか現れない人名や地名が散見される。人名ではクレレット (Clairette、ボーテの侍女)、エルマレユス (Ermaleüs、オルカニー王の息子)、リュディス (Ludis) 伯とファリエ (Falliers) 伯 (ボードゥーの援軍の指揮者たち)、地名ではモンタボー

みにボードゥーの結婚相手となるボーテの名は、「伝記物語」の系譜に属する『グリグロワ』のヒロインとしても出てくる。

『ボードゥー』の主人公は、「2つの楯を持つ騎士」という異名で王宮デビューを果たした後、誰も鞘から抜けなかった名剣を抜くことで群島王の姫君ボーテを妻に迎える権利を得ると、ボーテに結婚を強要していたマドワーヌ王を倒して大団円を迎えるという直線的な筋書きをたどっている[55)]。そこにはクレティアン・ド・トロワの物語の主人公たちが成長過程で経験したような精神的な「危機」は微塵も感じられない[56)]。さらには『名無しの美丈夫』の主人公ガングランが2人の女性（「白い手の乙女」とブロンド・エスメレ）の間で経験した揺れる恋心も認められない。そもそもロベール・ド・ブロワは物語のプロローグで手短に、高貴な若者ボードゥーが母の教えを守り、みずからの力で名誉を獲得し王として戴冠するという筋書きを明かしてしまっている。こうしたいわば機械的な筋書きを生んだ鍵は、道徳的かつ教育的な観点から物語を著したロベール・ド・ブロワの姿勢にある。恋愛において常に移り気だったゴーヴァン（ボードゥーの父）を正式に「ウェールズの貴婦人」（ボードゥーの母）と結婚させるという筋書きは、まさしくロベール・ド・ブロワの「道徳的・実践

ル（Montabor、エルマレユスが恋する姫君の父の領国）、タリス（Tallis、ボーテの居城の1つ）、デューヌ（Dune、ファリエ伯の町）、モンタギュ（Montagu、アーサー王の居城の1つ）、ガリヨン（Galion、イングランドの町）などがこれにあたる。

55） この点でボードゥーは、ヴィルント・フォン・グラーフェンベルクが中高ドイツ語で著した『ヴィーガーロイス』の主人公に似ている。なぜならガーヴェイン（ゴーヴァンのドイツ語名）の息子ヴィーガーロイスは王女ラーリーエへの一途な愛に鼓舞され、直線的かつ機械的に一連の試練を克服しているからである。『ヴィーガーロイス』については、拙稿「『名無しの美丈夫』と『ヴィーガーロイス』―2つの世界」、中央大学『人文研紀要』第56号、2006年、109-149ページを参照。

56） R. Trachsler, *Les romans arthuriens en vers après Chrétien de Troyes*, Memini, 1997, p. 90.

的教訓趣味」を反映したものだと言えるだろう。

本稿では、13 世紀末に筆写されたＮ写本の中から『ボードゥー』の部分だけに注目した。しかしながら『ボードゥー』を唯一伝える 620 ページからなるＮ写本のうち 478 ページから最後までは、本稿の第 3 節で指摘した通り、ロベール・ド・ブロワの先行作品を編纂したものとなっており、『ボードゥー』は「枠物語」として使われている。つまり本稿で試みた『ボードゥー』の読みは、13 世紀末以降に実際にＮ写本を手にした人々の読みとは異なるものである。したがって次の段階で行う必要があるのは、Ｎ写本が収録するロベール・ド・ブロワの作品群全体に注目し、『ボードゥー』をロベールの他の作品との関連から分析する作業である。ボードゥーが精神的危機を経験することなく大団円を迎える筋書きのほか、寓意的な主人公 2 人の名前（ボードゥーは「穏やかな美丈夫」、ボーテは「美」の意）、同じく寓意的な剣の名前（オノレは「称えられた、名誉ある」の意）、さらには作中に多く挿入された諺的表現[57]や教育的な内容の科白については、Ｎ写本が収録する作品群全体から検討することで、その意義が一層明確になるはずである。

謝辞　本稿は 2018 年度中央大学基礎研究費の助成を受けたものである。ここに特記し感謝の意を表したい。

57）クレティアン・ド・トロワの物語群に見られる諺的表現については、拙稿「《諺の修辞学》と《諺の神話学》―クレチアン・ド・トロワを例に―」（中央大学『人文研紀要』第 41 号、2001 年、83-111 ページ）を参照。